特集　オリンピックのランドスケープ
～われわれが後世に残すもの～

Olympic Landscape -Leaving a Legacy to the Next Generation-

竹内　智子*　上田　裕文**　近藤　　卓***　福岡　孝則****
Tomoko TAKEUCHI　Hirofumi UEDA　Taku KONDO　Takanori FUKUOKA

2013年9月8日，2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定した。1964年の高度成長期の東京オリンピックから半世紀以上。2020年は，前回オリンピックに合わせて作られた都市インフラが更新時期を迎え，成熟都市となった東京で開催する大会となる。

2014年12月，IOCは「オリンピックアジェンダ2020」を公表し，競技大会におけるすべての側面で持続可能性を考慮することとした。今回の東京大会も既に立候補ファイル時点の計画から，新規施設を取りやめ，既設施設の活用の計画変更を何度か行っている。また本年7月には，内閣総理大臣が，神宮外苑に計画されている新国立競技場の白紙撤回を発表し，アスリート第一，できる限りコストを抑制する再検討を始めている。この2年でも巨大な施設を集中的につくるオリンピックから，着実にそのあり方が変わってきており，まさに我々は都市の歴史の転換点におかれていると言える。

以前は，発展途上国の発展の起爆剤となっていたオリンピック・パラリンピックであるが，現代の成熟都市におけるその社会的意義とは何であろうか。

一生に一度，巡り会うかどうかの世界的イベントを，我々は5年後に迎える。好むと好まざるとに関わらず，それに合わせた都市空間がつくられ，その期間には世界中の注目が集まる。この大きなインパクトをわれわれはどのように受け止め，どのように行動していけばよいのであろうか。

本特集は，第1部で，新たな社会的意義を考えるため，これまでのオリンピックと都市の関係を俯瞰した論考を寄せていただいた。

第2部では，過去の経験を現在に活かすため，過去オリンピックが都市空間にどのような影響を与えたのか，当時は何ができ，何ができなかったかを東京，バルセロナ，ロンドンを例に，実際の空間づくりに携わった方々を中心に論じていただいた。

第3部は，2020年東京大会に向け，ランドスケープ関連の最新の内容について，現在，第一線で取り組んでいる会員による紹介である。

そして第4部では，2020東京大会とその後の未来に向けて何をしていくべきか，都市計画，公共空間，芸術文化，スポーツなど各分野を牽引する実務家の方々に，自由に語っていただいている。

1964年の東京大会では，産・官・学のランドスケープ専門家が協力して新しい空間づくりに携わり，駒沢オリンピック公園や代々木公園などの後世に残る公園をつくり出した。この経験から，その後活躍するランドスケープ分野の多くの人材が生み出されたという。

2020年はどうであろうか。

われわれは，次の世代に何をメッセージとして，空間として，経験として残せるのか。学会が，産・官・学の協力・発信の場になることを願う。そして本特集が，様々な立場の読者が，考え・行動する一助となれば幸いである。

読者アンケートのお願い

編集委員会では，今後の誌面づくりの参考とするため，特集内容に関する学会員の皆さまからのご意見を募集しております。件名に特集タイトルをご記入の上，①氏名，②所属，③連絡先（e-mailなど），④特集に関するご意見等（400字程度）を下記のアドレスまでご投稿ください。なお，ご記入頂きました個人情報につきましては適正に管理し，ご意見の内容に関する連絡等に利用させて頂く場合がございます。ご意見に対する個別の回答は致しませんのでご了承ください。

［読者アンケート送信先アドレス：hensyu@jila-zouen.org］

*東京都建設局　**札幌市立大学デザイン学部　***近藤卓デザイン事務所　****神戸大学大学院工学研究科建築学専攻